

第一回領域会議の雑感（平成 31 年 2 月 17-18 日@群馬県磯部ガーデン）

喜田聡（東京農業大学・生命科学部・教授）

会議後の感想は「2日間楽しかった」であった。領域会議の醍醐味の一つは、よく知らなかった研究者同士が得意とする研究や技術を披露し合い、新たな連携や共同研究を開始することである。別の言い方をすれば、領域会議には、自分のグループにはなかった視点や技術を手にしたたり、また、他のグループに協力して共同研究を開始するチャンスが潜んでいる。学会では、「ああいうことができれば」と漠然と思うことも、いとも簡単に相談できたり、実現できる。今回も、自分の研究に利用できそうなツールや技術に出会い、一方で、個人的にはモデリング研究の視点やストラテジーに感心し、あっという間の2日間であった。

領域会議の冒頭では、林朗子領域代表より、今回の目的が「コミュニケーション」であると宣言された。参加者の名札のストラップは青と赤に色分けされ、「シニア（青）」と「ジュニア（赤）」がコミュニケーションをとりやすいように配慮されていた。これまでに総括班では何度も会議を重ねてきたものの、お互いの研究を披露し、じっくりと話し合う機会は初めてである。特に、それぞれの研究が

ループのメンバーが一堂に会するのも初めてである。目論見通りに、会を通して、いろいろな場面で青と赤の組み合わせの会話が行われていたように感じられた。個人的な思いであるが、私は学生の頃、このような「班会議」に縁がなかった。そういった意味で、学部や修士の頃から班会議に参加できる若手のことを羨ましく感じている。大きな学会や研究会とは異なり、参加者の距離が近いので、論文にはでてこない進行中の実験の苦労や裏話を聞くこともできる。「赤」のストラップを手にした若者は、このチャンスをいかして、いろいろなことを吸収し、今後役に立てて欲しいと思う。

今回の会議では、外部評価委員の先生方が特別講演された。甘利俊一先生（理化学研究所栄誉研究員、東京大学名誉教授）は「脳の計算論：物質と情報」というタイトルで講演された。AI と関連させて、ビッグバンから、生物、DNA、脳、意識に至るまで、ユーモアたっぷりに語って頂き、「目から鱗」と感じられる解説が次々登場した。会場では唸ったり、感嘆する様子が感じられ、ビデオに残して、一般の皆さんにも楽しんでもらいたい講演であった。一方、前日に米国から帰国されたばかりで、しかも、日帰りの強行軍で駆けつけて頂いた岡野栄之先生（慶應大学医学部教授）は「iPS 細胞技術と遺伝子改変霊長類を用いた神経科学」

というタイトルで講演された。短い時間の中で、その米国出張での情報も披露しつつ、最先端技術が次々と飛び出す圧倒的な研究をご紹介頂いた。「また参加したい」と有難い言葉を頂けたことも領域一同嬉しい限りであった。

会議の主軸として、計画研究代表と分担研究者が、これまでの研究と研究計画を発表した。講演は、まさにマルチスケールであり、バラエティーに富んでいた。詳細を紹介できないのはとても残念であるが、多くの未発表データや新しいアイデアが含まれていた。今回のメンバーには、前身「マイクロ精神病態」から継続されている先生も含まれている。ただ、各先生の発表を聞いた感想として、単なる継続ではなく、それぞれ仕切り直しされ、新規課題が開始された感があった。前身から本領域の発足まで1年間のブランクがあったが、この間が（幸いにも）充電期間となって、それぞれの研究課題がパワーアップしたように感じられた。一方で、甘利先生は閉会の講評の中で「新たな波」という言葉をお使いになったが、今回新たに参加された先生達の発表からは「新たな波」を感じることができた。若手の先生の発表を聞き、今後は是非とも「大暴れ」して欲しいなとも感じた。

今までに、多くの新学術の領域会議に出席してきたが、その領域毎にカラーが

あり、個性があり、それぞれ独特の「ノリ」を感じる。多分、発足前からの総括班活動を通して、目的、目標、問題意識が共有され、知らず知らずのうちに、チームカラーが出てきているためだと思う。次回の領域会議で初めて参加される公募研究の先生達の目にはどのように映るのかは興味があるものの、私の感想としては、我が領域は、真面目に、ピュアに、かつ情熱的にサイエンスに取り組む集団と感じていて、この感が今回の会議を通してもっと強くなった。

会の冒頭では、林代表より、鶴岡八幡宮、伊勢神宮、伏見稲荷には領域の成功を祈願した絵馬があることが披露された。林代表は今後の5年間をまだまだ不安に感じられているだろうが、私としては、絵馬に書かれていた通り、この領域の成功が予見されたような2日間であったように思う。

最後に、領域会議の開催にあたり、ご尽力された林朗子ラボの皆さんに深く感謝申し上げます。

(追記)

__初日夜には、2時間にわたりポスターセッションが行われ、23題のポスターが発表された。今回は、総括班のみであったので、時間の余裕があり、じっくり説明と意見を聞いて、ディスカッションすることができた。我々にとっても、生

きのよい若手研究者を覚えることができる良い機会となった。若手優秀発表者として、白井福寿さん（群馬大学）、豊島学さん（理化学研究所）、福島穂高さん（東京農業大学）、石川理絵さん（東京農業大学）が表彰され、特別賞としてPIながら2つのポスターをまる2時間発表された澤田誠先生（名古屋大学）が表彰された（拍手!）。